

# 発音に対する自己モニター能力 発音評価上位者と下位者の相違

神山由紀子 (かみやま ゆきこ) kamiyamayu@aol.com

## 1. はじめに

日本語学習者の中には、自然な発音を習得している者がいる反面、母語の影響と思われる特徴を残している者もいる。この相違はどのように生じるのであろうか。体系的な発音指導が十分でない現状を考えると、指導側の要因より学習者側の要因が強いと考えられる。学習者自身の発音習得に対する意識、態度や行動が自然な発音習得にどのように結びつくのであろうか。本調査では、学習者側要因として、自己モニター能力に焦点を当てて、考察する。

## 2. 自己モニター能力の定義

クラッシュェンの「モニター仮説」に始まり、オマーリー(1990)、レベルト(1989)らが、「自己モニター」に言及している。本稿においては「自己モニター」を以下のように定義する。「自己モニター能力とは『自己の発音を聴き取り、それを内在する何らかの音声規範と照合し、その後形式処理し、調音し、音声として産出し、更にその音声を聴取する』という言語処理過程において、音声的特徴に留意し、何らかの逸脱を感知した場合、修正を試みること。」

## 3. 発音評価

日本語学習者の発音を評価するために発音調査を行った。まず、学習者にとって発音が困難であるとされる特殊拍などの音声項目を含む「発音タスク (単語 24、文 8、文章 1)」を作成した。調査協力者 17 名による「発音タスク」の発音を録音し、それを調査時点での学習者の発音能力とし、評価対象とした。調査協力者の発音を日本語母語話者 9 名が聴取の上、5 段階評価した。評価結果を上位・中位・下位の 3 段階(平均値 $\pm$ 0.5SD)にレベル区分し、上位群 4 名、下位群 4 名の中から、自己モニターの内省調査の対象者を絞ることとした。

## 4. 自己モニターに関する内省調査

### 4-1 内省を引き出す調査方法：再生刺激法

再生刺激法は「特定の行動過程を録画し、その過程を再生視聴しながら行動の背景にある意識や態度を言葉で表現してもらう方法」であり、発音に対する自己モニターに関する内省を引き出す手法として適している。再生刺激法とあわせて、フォローアップ・インタビューを行い、十分な内省発話を得られるように努力した。

### 4-2 調査手続き

「自己モニター」内省調査では「発音タスク (調査語 16、調査文 15)」を作成した。「発音タスク」を調査協力者が発音している様子をビデオ録画し、録画直後に再生視聴し、発話時にどのようなことを考えていたかを言語化してもらった。内省発話をすべて文字化し、二次資料とした。

#### 4-3 調査対象者

調査協力者 17 名中、上位群・下位群から、内省発話が十分に採取できた者を 1 名ずつ取り出した。上位群の NNS4、下位群の NNS15 はいずれも英語話者で、日本語レベル初級後半レベルであった。学習時間は NNS4 は約 880 時間、NNS15 は約 450 時間であった。

### 5. 分析方法

#### 5-1 KJ法の手法による分析

内省発話を解釈する方法として、KJ 法の手法を用いた。まず、一まとまりの発話内容をカードに簡潔に記載し、その内容を丁寧に汲み取り、述べている内容が近いものを小グループにまとめていった。小グループをさらに大グループにまとめた。次にグループ分けしたカードを関係が近いものを近くに置くなどして、空間配置した。因果関係や相関関係などを考慮し、内省発話の全体を捉えた。

#### 5-2 調査協力者の自己モニター発話の全体図

(次ページの図を参照)

### 6. 結果

#### 発音評価上位者と下位者の自己モニターの特徴

共通点	相違点
1) 内在する発音基準との照合 2) 聴解力と発音との関係に言及 3) 自分の弱点を認識(ラ行音) 4) マンプリングや繰り返し練習	1) 発音に向ける注意(NNS4は量、質とも多い) (内省発話量の違い、発音練習量の違い) 2) 到達目標(NNS4は母語話者並みの発音を目標) 3) モデル基準の獲得(NNS4のCD活用のインプット) 4) NNS15に見られる苦手な発音回避などの消極的 ストラテジー 5) 母語の発音の影響(NNS15は強い)

評価上位者の NNS4 も評価下位者 NNS15 も共に、自らのうちに何らかの発音基準を獲得しなければ自分の発音を正しく評価できないことを認識している。NNS4 は自らの発音に注意を払い、モデル基準を求めて、母語話者並みの発音を目指しているが、NNS15 には苦手な発音の回避や母語である英語の発音を取り込む行動が見られた。上位者と下位者の自己モニターの相違は発音習得に対する意識や到達目標とも関わり、インプット・アウトプットの量的差によると思われるモデル基準の獲得などに観察された。

### 7. まとめ

まとめとして、学習者自身の発音習得に対する意識を高め、モデル基準のインプットを量的に行い、音声特徴への留意を量・質とも高めることの重要性が分かった。

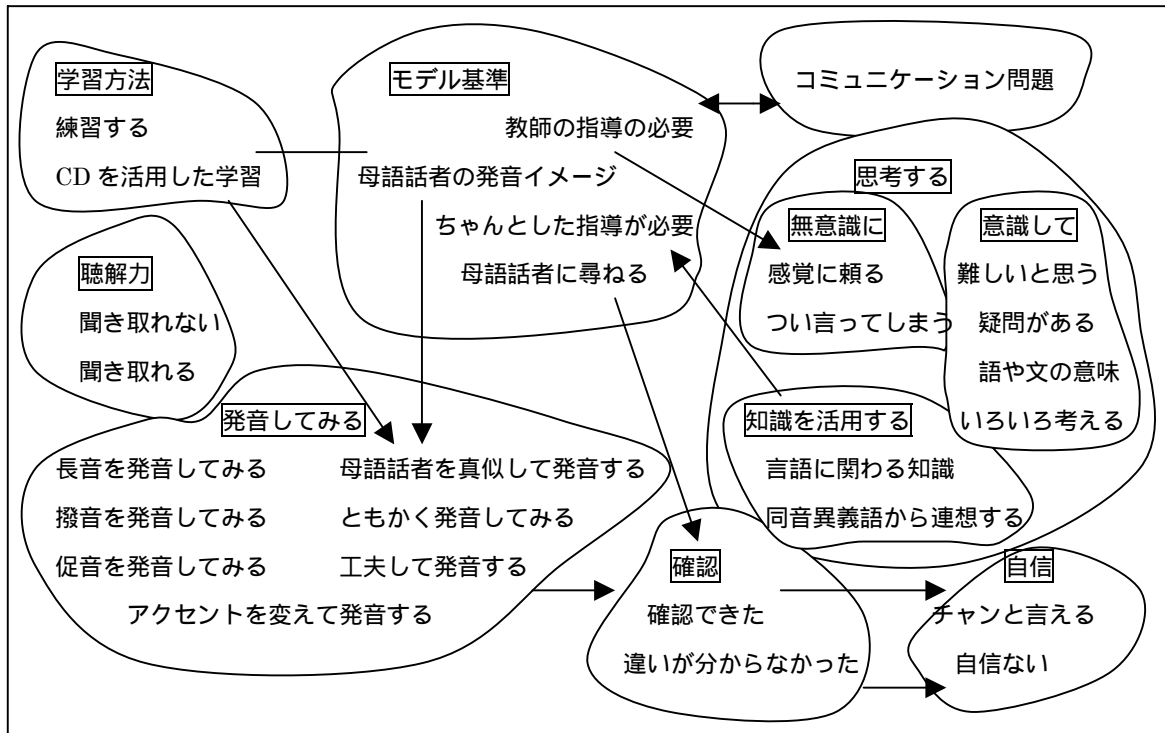


図1：NNS 4の自己の発音に対する内省発話の全体図

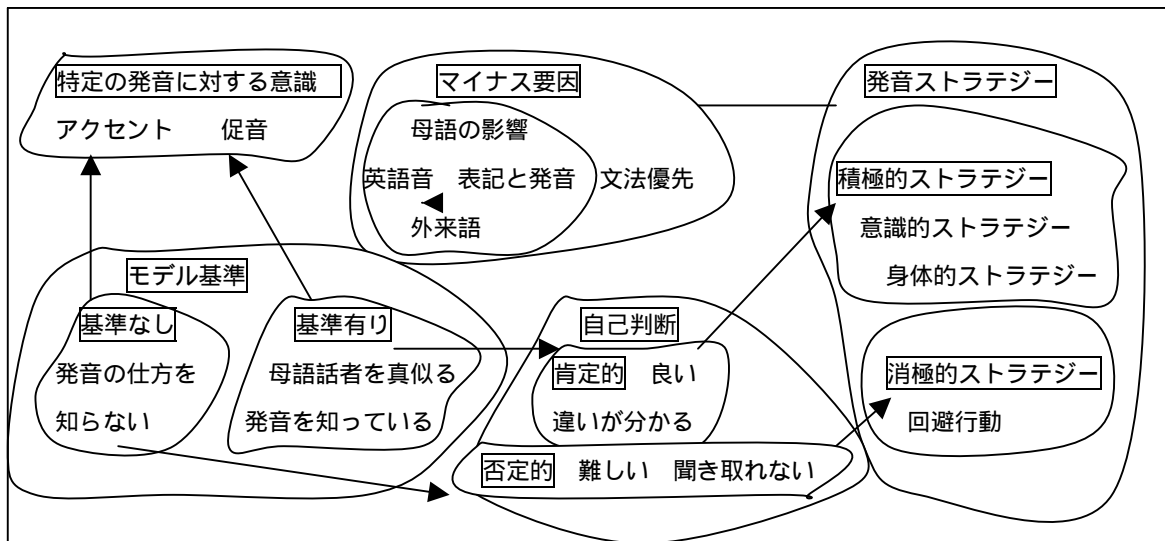


図2：NNS 15の自己の発音に対する内省発話の全体図

参考文献

川喜田二郎 (1967) 『発想法』 中公新書

田中博晃、山西博之 (2004) 「英語学習動機に対する質的解釈の試み—ある中学1年生の少女の「語り」から見てくるもの—」 『日本教科教育学会誌』 第26巻 第4号, 39-48

Levelt, W.J.M. (1989) *Speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press. 458-499

O'Malley, J.M. & Chamot, A.N. (1990) *Learning Strategies in Second Language Acquisition*, Cambridge Applied Linguistics